

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔の巻

朝の散歩の道すがら、地這いのようにして駐車場スペースに伸びてきて咲いている朝顔の花を見かけて、カミ様（我が家のカミサンの尊称です）は「あら、“朝顔につるべ取られてもらい水” みたいね」と声を発しました。朝顔のために駐車スペースを譲っているそのお宅の方が、朝顔につるべを譲った加賀千代女と同じように心優しいお人柄なのだと思えました。

改めて「歳時記」を調べてみると朝顔は秋の季語になっていました。花の時期が立秋（今年は8月7日でした）の後とされているからなのでしょうね。しかし、私たちの子供の頃には、夏休みといえ、ラジオ体操や絵日記と並んで朝顔の観察などが思い浮かびますね。俳句の世界と違って、幼いころから夏の風物詩として馴染んできた朝顔には“夏を代表する花”というイメージがあるように思えます。オンデマンドで投句をお願いした即興俳人の高幡大馬王殿も、「朝顔と言えば、ハンコを集めたラジオ体操が、自分の小学生の夏休みの記憶です」として次のような句を寄せてくれました。

朝顔や ハンコ集めし 遠き日々 高幡大馬王



朝顔は、ヒルガオ科サツマイモ属のつる性植物で一年草です。原産地が熱帯アジア、ヒマラヤ山麓で、日本には奈良時代に遣唐使が中国（唐）から薬草として伝わってきたのだそうですが、江戸時代に品種改良が大きく進んで、如何にも“日本人好み”の鑑賞用植物になったのです。バリエーションも豊かで、花色も、紫、ピンク、白、水色などさまざまで、濃い地色に白い斑入りの華やかな品種もあります。朝顔は一日花ですが翌日には新たな花が咲いてきます。花が咲いた後にできた種を採取して翌年の春に種まきをすれば、その年も楽しむことができます。初心者でも育てやすい花ですね。「朝顔」の花名は、朝に花を咲かせ、昼にしぼんでしまう様子を「朝の美人の顔」に例えた「朝の容花（あさのかおばな）」に由来しての意味であるといわれています。“美人と言っても幅広うござんす”で、華美でなく妖艶でもなく、楚々とした風情を漂わせる日本美人で、女優で言えばさしずめ吉永小百合といったところでしょうか。

朝顔全般の花言葉としては、「明日もさわやかに」「結束」「愛情の絆」というポジティブなイメージの花言葉の他に「私はあなたに絡みつく」という少しゾッとする花言葉があります。いずれも、朝顔が支柱などにツルをしっかりと巻きつけて伸びていく性質の花だからついた花言葉なのでしょうが、ツルを「あなた」と称したりするから、「絡みつく」なんて吉永小百合に似つかわしくない花言葉になってしまったのでしょうか。白色の朝顔の花言葉は、「固い絆」「溢れる喜び」、ピンク色の朝顔の花言葉は、「安らぎに満ち足りた気分」、青色の朝顔の花言葉は、「はかない恋」「短い愛」で、赤色の朝顔には「はかない情熱的な愛」、紫色の朝顔には「冷静」「平常」という花言葉があります。朝顔（アサガオ）の英語の花言葉も「love in vain（はかない恋）」「affection（愛情）」ですから、朝顔に向ける思いには東西の区別がなさそうです。

昼顔はヒルガオ科ヒルガオ属の多年草で、同じヒルガオ科の朝顔と似たなかなか素敵なお花を咲かせますが、日本原産の在来種で、北海道から九州までの日本全国に分布しているため学名も *Calystegia japonica* になっています。朝顔と違って、朝から花を咲かせて夕方にしぼむまで昼間も咲き続けているところからこの名がついているのですが、何と言っても、日当たりのよい野原や道端、線路際、空き地、河川敷などに普通に自生するだけあって、朝顔にはない野性味を漂わせているところが違います。英名もバインドウィード (*Bindweed*: 「巻き付く雑草」の意)。朝顔が鑑賞用に栽培される園芸植物であるのに対して、昼顔は地下茎が長く伸びて増殖し一度増えると駆除が難しいため、大半は雑草として扱われているのだそうです。



雑草扱いという気の毒な処遇を受けている昼顔ですが、一方きちんと“花”扱いされており、「絆」、「優しい愛情」、「情事」、「友達のよしみ」といった花言葉が与えられているのですから気が休まる思いがします。高幡大馬王殿も、「子供たちが小さいころは夏休みには一泊二日で海水浴に行ったものでした。昼顔と浜昼顔は同じヒルガオ科で、昼顔と言えば、海水浴場の浜昼顔です。」として次の句を贈ってくれました。

昼顔や 波に揉まれる 子ら笑顔 高幡大馬王

そうそう、浜昼顔ねえ。何気なく海岸を歩いていて、薄いピンクの可憐な花が咲いているい赤の写真のような光景をご覧になったことがあるのではないのでしょうか。園芸植物にも生け花にもされない昼顔にとっては、このような野趣に富む舞台が格好の出番のような気がします。



夏の夕方に開花し翌日の午前中にしぼむ「夕顔」はウリ科ユウガオ属の一年草です。北アフリカまたはインドが原産地と考えられているつる性植物ですが、日本でも古くから栽培されていました。平安時代中期の、長編物語の『源氏物語』（紫式部著）や随筆『枕草子』（清少納言著）にも夕顔が登場します。ヒルガオ科の朝顔と昼顔と違って、優雅な気配を漂わせた綺麗な花ですね。一方、ウリ科だけあって大きな実を实らせますが、このヒョウタンのような大きな果実を、細長く加工して乾燥させたものが、巻き寿司などに使われる干瓢（かんぴょう）となります。花言葉は、「夜」「はかない恋」「罪」ですが、「夜」は開花時間にちなみ、「はかない恋」は一つの花の短い開花時間に由来するともいわれています。



高幡大馬王殿も、光源氏に見初められながら物の怪に襲われて亡き人になってしまう『源氏物語』に登場してくる夕顔に対する想いを絡めて詠んだとして次の句を贈ってくれました。

「夕顔」に 呼ばれるがごと 熱帯夜 高幡大馬王

「熱帯夜の寝苦しさは夕顔のせい??」という感じで詠んだのだそうです。改めて『源氏物語』を読んでみて、相当に強い思入れを感じたようですね。

朝顔・昼顔・夕顔の他に、「夜顔」があるなんて初めて知りました。ヒルガオ科サツマイモ属の多年草ですが、熱帯アメリカ原産であることから、日本では越冬できないことも多いため、1年草として扱われているのだそうです。花は日が落ちてから咲き始め、朝になるとしぼむ性質で、花が直径15～20cmほどと大きい点も特徴で、大きなラッパ型の白い花からは甘い香りが漂うのだとか。開花時期は7～10月で、直径15cmにもなるラッパのような形の、純白の花を咲かせるそうです。夏は夜8時頃から、秋は夕方4時頃から咲き始め、翌朝にはしぼんでしまうというのですからまさに「夜顔」ですね。甘い香りを辺りに漂わせ、暗闇でふわりと花びらを広げる様子はなんとも妖艶な雰囲気だそうですよ。



夜顔の花言葉は、「夜」「妖艶」「夜の思い出」。これは夜だけ姿を見せてくれる夜顔の美しい花に由来しているようです。暗闇に浮かぶ純白の大輪花は神秘的で妖しげに見えることでしょう。ミステリアスな花言葉がぴったりのようですね。さて、朝顔・昼顔・夕顔に夜顔のつる草系カルテット。どれも名前に「顔」が付き、花の形もよく似ているため、なかなか区別がつけにくいところもありますが、それぞれの持つ美点到心寄せながら過ごせば少しは暑さもしのぎやすくなるかもしれませんね。